



名古屋柳城短期大学 ちやべるにゅーす

第5号・クリスマス特集

2002年12月1日

クリスマス号にあたり、あるお話を紹介しよう。

老いた一人の農夫が、ゆり椅子に身をゆだねて、暖炉の火を見つめていた。遠く教会の鐘が鳴っているクリスマス・イブ。

彼はもう長いこと、教会に背を向けて生きてきた。「神が人間になっただと、ばかばかしい。誰がそんなことを信じるものか」。目を閉じ、薪のはじける音を聞きながら、彼はまどろみかけていた。

突然、窓ガラスに何かがぶつかる烈しい物音。それも次々に、更に更に烈しく。何事かと彼は身を起こした。窓際に立って見たものは、音も無く雪の降り積もる夜闇の中に、この家

をめざして押し寄せてくる、おびたしい小鳥の群れだった。雪闇に渡りの道を誤ったのだろうか。小鳥たちは灯を求めて、ガラス窓に次々と打ち当たっては、空しく軒下に落ちていく。

彼はしばしばうぜんとその有様を眺めていたが、外に出るや、雪の降り積もる中、一目散に納屋へと走った。扉を大きく左右に開け放ち、電灯をあかあかと灯して、乾草を豊かに蓄えた納屋へ、小鳥たちを呼び入れようとした。彼は叫んでいた。「こっちだ、こっちだ。こっちへ来い!」。しかし、羽ばたく小さい命たちは、彼の必死な呼び声に応えず、なおもガラス窓に

突き当たっては死んで行った。

農夫は心のうちに思った。「ああ、私が小鳥になって彼らの言葉で話しかけることが出来たらなら!」。一瞬彼は息を飲んだ。彼は瞬時にして悟ったのだ。「神が人になられた」ということの意味を。彼は思わずその場にひざまずいた。今や人となりたもうた神の神秘に満ちた愛が、もろく老いた農夫を、静かにおおい包んでいた。彼の上に降りかかり、降り積もる雪は、そのしるしとなっていた。

「神が人になられた」

本学理事長 森 紀旦

以上である。わたしはこれを解説しようと思った。しかし、それは無駄であることがわかった。読んでい

ただければよいのである。そして本当のクリスマスを迎えていただければ。

これはカトリック教会のS神父が作られた散文詩である。



(図e)

水曜日の礼拝から



三好丘聖マーガレット
幼稚園教諭
小野田陽子

私は名古屋柳城短期大学を卒業し、附属の豊田幼稚園で6年間お世話になりました。その後一度退職し、非常勤として柳城幼稚園の預り保育等をお手伝いし、今年度より、三好丘聖マーガレット幼稚園の年中組の担任として、子どもたちと過ごしています。

今、こうして振り返ってみると、出会った子どもたちの数だけ、沢山の思い出が蘇ってきます。どの思い出も、忘れられない私の大切な宝物です。この出来事は、その中のひとつです。

年長組の担任となった私は、ひとりの自閉症という障害を持った子どもと出会いました。その子は、M子ちゃんという女の子です。私は、M子ちゃんを迎え入れることで、まず、これからの一年、この子と、どう接していけばよいのだろうか？他のクラスの子どもたちは、M子ちゃんを受け入れてくれるのだろうか？と、幾つもの不安を抱えていました。そんな中で新学期がスタートしました。

4月、M子ちゃんは、その時の気分で、保育室に入って来たり、出て行ったり。その度に、M子ちゃんを追いかける私。その間、待たされてしまうクラスの子どもたち。時には、クラスの母親から、「先生は、M子ちゃんのことで大変だから、うちの子に面倒を見させているんじゃないの？」という声が聞こえてきました。何となく、感じてはいたものの、ただ、自閉症という障害をもって生まれただけなのに、M子ちゃんのことを良く思っていないことを、口に出して言われたことが、悔しくて仕方がありませんでした。

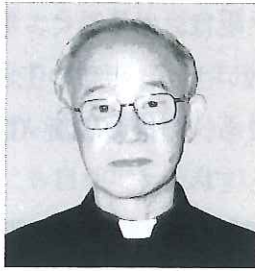
そんな中で、M子ちゃんの母親から、ようやく、M子ちゃんを受け入れてくれる園（付属豊田）があったこと、そして少しの間でも、

普通の小学校へ進ませてあげたいという気持ちを伺い、園長とも相談し、できるだけのこととはしていこうということになりました。

小学校で、教室から飛び出しては大変です。それからの毎日は、少しでも皆と同じ経験をさせようとする私と、M子ちゃんの知恵比べです。そんな日々を過ごす中で、M子ちゃんは、運動会、クリスマスページェント、造形活動と、時間はかかりましたが、皆と同じように経験し、大きく成長していきました。一つひとつが、本当に感動でした。

3学期の生活発表会で、ブレーメンの音楽隊をすることになり、M子ちゃんは、ネコ役がお気に入りでした。しかし、他の女の子たちも、ネコ役がやりたくて仕方ありません。発表会を直前にひかえ、ある日、「今日は、役を決めてやってみるね。沢山なりたい子がいたらどうする？」の言葉掛けに、「ジャンケン！！」と子どもたちの声。M子ちゃんは、負けてしまいました。自分の気持ちをコントロールできないM子ちゃんは、大泣き。保育室を飛び出していきましたが、他の子どもたちの気持ちを考えると、追いかけるられませんでした。そして、その日の午後、当日の役決めをすることに不安を抱えながら、「ネコになりたいお友だち」と声を掛けると、誰も手を上げません。子どもたちは、無言のまま、「だって、M子ちゃんが・・・」と言いたげな表情で、私の顔を見ていました。結局、M子ちゃんも、ネコ役で、ブレーメンの音楽隊を、クラス全員でやり遂げることができました。私は、その時、初めてクラスの子どもたちが、M子ちゃんのことを受け入れていたこと、M子ちゃんを取り囲むように、子ども一人ひとりが成長していたことに、気付かされました。この子どもたちが、この先、M子ちゃんのように、心に痛みを抱えている人、体に障害を持っている人々に出会った時、きっと受け入れることのできる強い心を持ち続けてくれることを信じています。神様が、どのような幼子をも、一人ひとり愛してくださったように、私も、そうあり続けていきたいと思います。

キリスト教Q & A クリスマス特集



一宮聖光教会牧師
聖光幼稚園園長
司祭パウロ塚田道生

Q1 サンタさんっているの？

幼稚園の子どもたちは10月下旬からクリスマスの準備を始めています。年少の子どもに「クリスマスって何の日」と聞いたら、「サンタさんが来る日」との返事でした。ある意味では完全な間違いでもなさそうです。四世紀にニコラスさんと言う司祭が、毎年クリスマスになると貧しい家庭にこっそりプレゼントを届けていたのが知られ、人々から聖人(セイント=サンタ)のニコラスとして尊敬され、サンタクロースと呼ばれるようになったのが起源だと言われています。子どもたちにとってサンタさんは待ちどおしいものですが、その喜びを知った子どもたちの中に優しい心が育って欲しいと思います。喜びを知った子どもは大人になった時、今度は自分たちも同じように子どもや貧しい人達を喜ばせるサンタさんになれるに違いありません。サンタさんは私達の周囲に、今でも本当にいるのです。

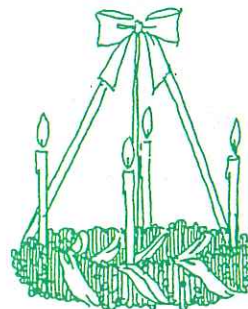
Q2 ページェントって劇？

教会付属幼稚園の最大の行事はクリスマスですが、中でも年長組の子ども達によるクリスマス・ページェントを両親や祖父母までが楽しみに待っています。10月の末から準備を始めているので、そんなに早くから準備をしなくてもと思いますが、子どもたちに粗筋を説明して、皆で話し合って配役を決めるのに時間が掛かるとのことです。最近はページェントが運動会やお祭りなどでも行われるようになりました。ページェントとは「ページを

開く」と言う意味の言葉から来ています。歴史的な出来事の場面を本のページをめくるように次々と表現し、造っていく意味から来ているそうです。動き回ったり、大きな声で会話する演劇とは違って単調ですが、見る側もその場面からイメージを膨らませることが出来れば、その場面のイメージがいつまでも残り、楽しいものになります。

Q3 キャンドル・サービスって何？

「クリスマス・イブのキャンドル・サービスに行くとおみやげをもらえる」と言う噂が広まっていると聞いて驚き、困っています。この不景気の時代にただでおみやげをもらえる所など余り聞きません。日本では商売上の値引き奉仕をサービスと言っていますから、ただでもらえるサービスと勘違いしているようです。聖書にはクリスマスに星が明るく輝き、空からの天使の声が聞こえ、野宿していた羊飼いたちが救い主の誕生を知り、また、東方の学者たちは星の輝きに導かれて幼な子イエスを訪ね当て、黄金、乳香、没薬をプレゼントとしてささげたと記しています。これらの記述にちなんで、クリスマスにはキャンドルの光の中でクリスマスの賛美を歌い、祈りをささげるキャンドル・サービスが行われるようになりました。教会用語では「サービス」とは神様に祈りをささげ、仕える礼拝の意味で使われています。教会ではクリスマスの意味を大切にして、イブ礼拝に参加した人達がプレゼントをもらうのではなく、福祉施設や貧しい人達のために献金をささげます。それが幼な子イエスへのプレゼントとしてささげるにふさわしいサービスなのです。



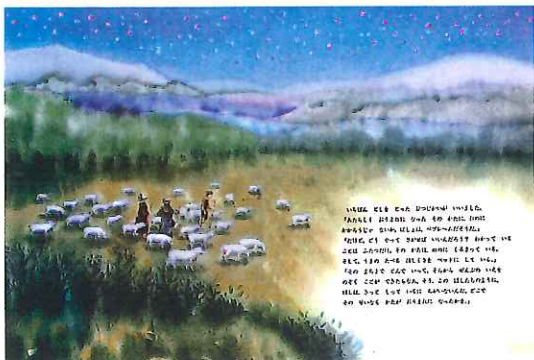
クリスマス物語とファンタジー

本学教員
尾上明子

クリスマス物語は、ファンタジーに満ちています。「いわゆるクリスマス物語」は、新約聖書の「マタイによる福音書」と「ルカによる福音書」を繋ぎ合わせたものと思われませんが、それは単に機械的に繋ぎ合わせたのではなく、後生の人々が、よく解らないところ・曖昧なところを想像力によって補い一つのストーリーとして構成したのでしょう。

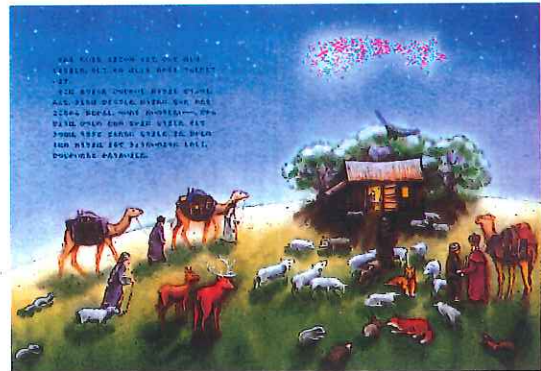
今回は、この「いわゆるクリスマス物語」が、絵本作家によって、更にファンタジー豊かに作られた作品をいくつかご紹介したいと思います。

まず「ペンギンピート」シリーズ、そして「にじいろのさかな」(ボローニャ国際児童図書展エルバ賞受賞)でお馴染みのマーカス・フィスターの美しい作品、「クリスマスのほし」(1995年、講談社)です。「にじいろのさかな」で私たちが目を見張ったように、この作品も銀色の星が美しく効果的に描かれています。羊飼いたちが空を見上げた時、一面に散りばめられていた星が、彼らがどうして救い主を見つけたらよいか思案していると、ゆっくりゆっくり動きはじめ、一つの大きな星となり彼らを導くのです。(図a)



(図a)

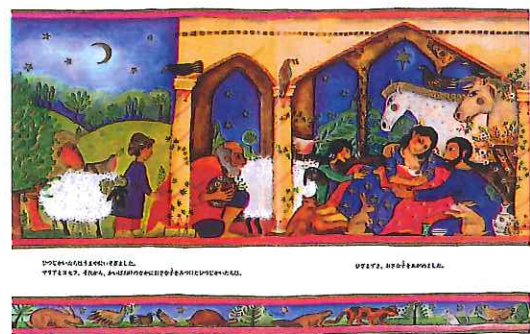
その星に導かれたのは、羊飼いたちだけでなく、東の国の王様たちや森の動物たちもいました。しかし、この「銀の星」以上にフィスターが伝えたかったことは、おそらく、赤ちゃんとして生まれた救い主が、平和の王として来られたことでしょう。最後の場面(図b)は、それをよく現しています。



(図b)

赤ちゃんを見た人たちの気持ちは一つでした。それはこの赤ちゃんを心からお迎えし、平和をお祈りしたいということでした。「だからひょうは、ひつじのむれのなかまになりました。そして、きつねは、うさぎとともにだちになりました。また、ひがしのくにのおうさまは、まるできょうだいのようにひつじかいとかたりあいました。」と書かれています。

次にご紹介するのは、「クリスマスのおはなし」(図c、1994年、徳間書店)ジェーン・レイの作品です。



(図c)

ケート・グリーンナウェイ賞の最終候補に残るまでになったこの作品は、「いわゆるクリスマス物語」にストーリーが忠実に運ばれてい

ますが、絵は色鮮やかで細やかな工夫に満ち、見飽きることがありません。イギリス生まれの彼女ですが、マリヤはまるでインドの女性のように長い髪を編み、大きなお腹でろばに乗り、旅をしています。また、赤ちゃんにおっぱいを含ませている様を描くところは、いかにも自然で、彼女のこだわりを感じさせるユニークな作品と言えます。天使の羽や服の模様なども楽しめます。一度手にとってご覧ください。

三つ目は、「クリスマスものがたり」(図d、1989年、太平社)ブライアン・ワイルドスミスの作品です。



(図d)

日本でも多くのファンがいるワイルドスミスのこの作品は、「いわゆるクリスマス物語」に新しい人物を登場させ、物語をその角度から展開させている点と印象的な絵の描かれ方に注目させられます。まず物語は、マリヤとヨセフが母ろばを連れ、旅に出るところから始まります。新しい人物とは、子ろばの世話を頼まれた隣のレベッカという小さな女の子。子ろばは、そのうちお母さんがいないことが寂しくてたまらなくなります。そこでレベッカは子ろばを連れ、母親探しの旅をします。途中でヘロデの兵隊や羊飼いに道を尋ねます。そして、とうとうベツレヘムの町までやってきました。そこで見たものは、大きな星とすばらしい音楽の響き。この作品では、星は金色のくっきりした形です。レベッカと

子ろばは、雪の降りしきる中で馬小屋の中にいる赤ちゃんを見つけます。(図e p.1)レベッカが「赤ちゃんの名前はなんていうの?」と尋ねると「イエスというのよ」とマリヤが答えます。子ろばは、もちろん、そこで自分のお母さんに会うことができました。子どもは、よく登場人物と同一視しますね。最後に自分の母親に会えて安心し、更に救い主である赤ちゃんに会うことができたことをさりげなく伝えます。しかし絵によって厳粛なことが起こったことを感じさせる作品です。

今回は、紙面の都合上三点だけを取り上げましたが、クリスマス物語を読む時、私たちは、レギーネ・シントラー女史の次ぎの言葉に心を留めたいと思います。

イエスが生まれたとき、それは祭日ではありませんでした。家畜小屋や動物の隠れ家である岩穴は牧歌的な場所ではなく、真の貧しさを表す場所でした。子どもの両親は、最も不確かな時間の中で、将来に対する不安、子どもに対する不安でいっぱいであったことでしょう。《中略》……多くの年月が経った後、すなわちイエスが死んですでに数十年経ってから初めて、誕生の物語が記述されました。イエスの誕生の初めが最初のキリスト教徒にとって重要となったのです。《中略》……その際にイエスの復活が中心にありました。誕生は、この復活へとつながっていくこと、そして、この生涯が神への道を示すことのためだけ、そのはじまりも物語る価値をもつものとなったと言えます。

『子どもと祝うキリスト教の祭り』(レギーネ・シントラー著、加藤善治他訳、1995年、日本基督教団出版局)より

※以上の作品は、本学図書館及び「世界のクリスマス展」(12月26日まで歴史資料室)でご覧になれます。

フィリピンでの植林活動に参加して Cultivate the Future

本学教員 鈴木裕子

わが家族の「ボランティア元年」

2001年夏、わが家、家族4人はフィリピンを旅しました。オイスカというNGOが主催する「子どもの森」計画に参加し、植林活動をするためです。偶然目にしたポスター、新聞記事をきっかけに「何かしたい」という一人ひとりの小さな想いを束ねて、わが家の「ボランティア元年」にしよう！と、とにかく出かけたのです。

O I S C A ? 「子どもの森」計画って？

さて、O I S C A (オイスカ) という耳慣れない名称を簡単にお話しておきましょう。正式名称は「The Organization for Industrial, Spiritual and Cultural Advancement-International」です。Organization (機構)、Industrial (産業)、Spiritual (精神)、Cultural (文化)、Advancement (促進)。頭文字をつなげてO I S C Aなのですが、その活動は、この言葉が示すように、発展途上国の産業開発、特に農業、林業、水産業などの一次産業を支援し、そこに生きる人々の精神や文化を大事にした人材育成、環境保全を促進する、日本に本部を置く国際NGO (非政府組織) です。

そのオイスカの活動のひとつに「子どもの森」計画があります。この活動は、一口で言うと「子ども達を主役に学校単位で実施されている森づくり」運動です。現在、24の国と地域、2500以上の学校で展開されています。

フィリピンで木を植える

私がフィリピンで見た光景は、強烈でした。何時間車を走らせても、見わたす限り緑のはげ山が続きます。草が茂っているだけの緑で

す。木の株、根っこすらありません。山の木々を、日本やアメリカをはじめとする先進国が、大きな機械を使って10年もかからない年月で伐採しました。その後、決して豊かでない現地の人達は、残った切り株を、燃料のマキとしてすべて使い切ってしまいました。使い切ってしまったとしても、現地の人には木を植える資力も知識もなく、放置されたままの現状となっています。この緑の山こそ、まさに人間が作ってしまったはげ山なのです。

私達は、ハイスクールの子供達と一緒に木を植えました。山の斜面にはアカシアマンギユウムの苗を植えました。海にはマングローブの苗を植えました。木を植えることによって、様々な恩恵がもたらされ、よい未来が開けるのです。けれど、この山や海が現地の人にとっての産業を産み出し、本当の意味で生活できる山になるのは、50年100年という年月が必要です。



フィリピンの人達の暮らしは今でも豊かとは言えません。今日その日を食べることに必死な大人に、木を植えなさい、そうしないと未来がない、などという言葉は何の意味も持ちません。ですから子ども達に対してメッセージを発するのです。未来を生きる子ども達に、将来のために緑を大切にし、自然を愛していくことが大事なのだよ、と伝え、学校単位で、隣接する山や海に苗木を植えて育てるという実践活動を通して、緑化の意義を学んでいきます。さらに、子ども達の活動に触発されて、まわりの大人も、少しずつ環境に対する関心が高まることも期待できます。

日本人だって、すてたものじゃない

このように環境保全や国際協力は、とても息の長い仕事で、世代をこえた取り組みが必要です。気の遠くなるような仕事です。けれど、現地で働くオイスカの人達は、日本人だってまだまだすてたものじゃない、と思わせるようなすばらしい人生を生き抜いています。この人達の努力と活躍から、次の世代として、現地の若者が動き出していることを実感できる段階にきているようでした。第一歩を踏み出す勇気と、それをあきらめないねばり強さが組み合わさった時、ドラマが生まれ、未来が拓かれるのだということを、心から感じました。

“癒された” ボランティア

この活動に参加して、“人のために何かをしてきた”という想いよりも、私自身が多くのものを得て、強烈なほどに視野を広げられ、さらに何かに“癒された”と感じました。パナイ島のイロイロという町の空港に降り立った時、そこには飛行機が飛ぶということが嘘のような暗い町並みと貧しい人々の姿がありました。けれど、なぜだか、むしろうきうきとした気分になってきました。人々からは貧しくても溢れるようなエネルギーを感じました。コラシナショナルハイスクールには、



つまらなそうな顔をした子どもが一人もいませんでした。タロク村の小さなデイケアセンターの先生の必死なまなざしは、本当の豊かさが何なのかという課題を突きつけているようでした。

世界は、今、自然破壊や貧困、民族紛争などの、克服すべき課題を数多く抱えています。

経済至上主義へ傾いてしまった「人間の生活や産業のリズム」が「大地や自然が持っている未来へのリズム」とあまりにもかけはなれてしまったために、その不協和音が世界各地に生じている、まさにそれは私たちのまわりに生じているように思えます。

フィリピンでの植林は、私にその「大地や自然が持っている未来へのリズム」を少しだけ取り戻させてくれた、それが私を癒してくれた「何か」だと思えるのです。私たちは、大地の音、匂い、手触りから生まれる発想をもっと大切にして、人と自然、人と人との関わりをドラマティックにデザインし直すことが求められているように感じるのです。

Cultivate the Future

21世紀を向かえて、新しく作られたオイスカのテーマは「Cultivate the Future - 大地と人にもっとドラマを-」だそうです。Cultivateは、土を耕す、才能を養う、精神を磨くなどの意味を持っています。「未来という広大なフロンティアを耕すためには、大地と人之间には、もっとドラマが必要だ」そんなメッセージが込められています。

ボランティアや国際協力は、本当に困っているとき何が必要か、自分には何が必要か、何ができるかを考えることが第一歩と言われます。けれど、なかなか実行に移せません。2001年をボランティア元年にしようと出かけた植林活動ですが、その後のわが家だって、どんどん海外に出かけてボランティアというわけには行きません。けれど、「Cultivate the Future - 大地と人にもっとドラマを-」をわが家のテーマに、身近で少しずつ、家族4人それぞれのスタイルで未来にドラマを耕していこうと考えています。“させていただいた”ボランティアの恩返しを、少しずつ“させていだけよう”と思っています。

そして、次に動き出すのは、自分かもしれない、皆さんが少しでもそんなことを感じてくれたら、と願っています。

元ハンセン病者太田先生と出会う —差別と偏見を乗り越える—



本学教員 三好禎之

本学の合同礼拝が行われる前日、7月16日、元ハンセン病患者であった太田先生と初めて出会いました。九州からいらっしゃる太田先生を出迎え、後遺症とご高齢であることから、少なからず不便さを感じておられる先生の様々なお手伝いを、させて頂きました。

私が、初めてハンセン病の名を聞いたのは20年位前だったでしょうか、松本清張原作である『砂の器』を読んだことです。当時、子どもながらに、家族と引き離され一生隔離された生活、また近隣の人々が一転してハンセン病患者を排除しようとするのに対して恐怖心を抱いたのを覚えています。1日半という短い時間を太田先生と共に過ごし、お話を聴く中で、『砂の器』を読んだ時の恐怖心が蘇ってきました。そして、どれほど多くの元ハンセン病患者が、偏見と差別に立ち向かい戦ってこられたのか、私達の想像を絶する世界を乗り越えて来られたのかと思いました。

先生が合同礼拝や私との会話で語っておられたお話の中で、特に印象的なお話が2つあります。1つは、2001年に国との和解が成立し保障金が支払われた時、それまで一切音信不通だった多くの元ハンセン病患者の家族が、療養所に面会に訪れたと話していたことです。太田先生は、そのような出来事に対して、「保障金目当てで面会に来たかどうかということはどうでもいい。こういった形であってもいいから家族に逢いたい。それが、ハンセン病者の真の気持だ。」と話していました。眼鏡の奥で遠くを見据える眼差しで、力強く元ハンセン病患者の声を語られることばに、太田先

生の願いが込められているようでした。

そして2つ目に、「謂れなき偏見（差別）と、謂れある偏見（差別）」を語られたことです。長い裁判過程で元ハンセン病患者は「謂れなき偏見（差別）」を受けているといわれるが、果たして「謂れなき偏見（差別）」とは何か、その問いを先生は絶えず自分自身に問い掛けていたそうです。そして、先生がたどり着いた答えとして、「謂れなき偏見（差別）」があるとすれば、「謂れある偏見（差別）」とは何かという次の問いであったそうです。そしてそれら全ての問いに対する答えとして、「偏見や差別はどちらか一方にまず存在するのでは無く、相互理解が成り立たないところに生み出されるのだ」と話されていました。また同時に、「この偏見や差別に対する問いを導き出すまでに多くの時間を要した」と語っていました。

これら2つのお話から私達が暮らす社会を考えると、人と人が接する中での信頼関係や結び付き、そしてそのような関わりから生まれる相互理解が、今日の社会において必要であり今まさに問われているのだと痛感させられました。また、多くの人々が国政によって別な世界に封印されるように隔離され、人間としての尊厳と人権を剥奪されてきた歴史を、私たち自身の歴史として語り続けていかなければならないと教えられました。太田先生が示されたこと、それは、私たちがどのような仕事につくにせよ、人と人が接する世界に生きるうえで、忘れてはならない事柄だと思えます。

2002年12月1日発行 第5号
発行所 名古屋柳城短期大学
名古屋市昭和区明月町2-54
編集兼
発行者 名古屋柳城短期大学 宗教委員会
印刷所 株式会社 丸和印刷



この印刷物は再生紙を使用しています。